Architectural Institute of Japan

日本建築学会東海支部研究報告書
第47号　　2009年2月

大学図書館におけるコモンスペースのプレースメイキングに関する考察
電子ジャーナル化に伴うコモンスペースの利用変化に関する研究

Consideration about the place making of the common space in the university library
- A study about the use change of the common space with e-journal-

5. 建築計画-2. 施設計画
大学キャンパス　　コモンスペース
プレースメイキング

正会員　○原　郭二*1　HARA Koji
同　加藤　彰一*2　KATO Akikazu
同　木下　誠一*3　KINOSHITA Seiichi

0. Abstract

Recently OPAC or e-journal have been spreading, therefor, you can obtain any information even if you do not go to the library. However, the university library is the important space as learning and communication in the university campus for the students. This study suggests new learning space and common space and investigates possibility of future good learning environment, and the aim is to achieve efficient Architectural plan design in the library.

1. 研究背景

国立大学では、大学の法人化、18歳人口の減少、第三者評価による競争原理政策の導入など大学間の競争激化を背景に、特色あるキャンパス環境づくりや教育・学習空間の整備など多様な施策の必要性が議論されている。特に大学図書館は大学の学習・研究などの教育基盤として重要な役割を担っている。最近は、OPACや電子ジャーナルが普及してきており、図書館に行かずとも情報を入手することが可能になってきている。しかしながら、大学図書館は学生のキャンパス内の学習空間・居場所としても重要な施設と位置付けられると考えられ、今後、従来の図書館機能に加えて充実した場所の提案が必要になってきている。

2. 研究目的

平成18年に出された文部科学省の審議会報告「学術基盤の今後の在り方について」[1)]では、大学図書館が大学の戦略的ビジョンに立って学生の学習及び大学生活の場としての、魅力ある場所としての図書館施設・設備の整備することを求めている。また、大学図書館には資料サービスだけでなく、7 項に述べるような建築的な「場としての図書館」としてのニーズがありそうであることから、それだけの要求にこたえられる図書館施設の整備の必要性は高いと考えられる。そこで本研究では、新しい学習空間や居場所(共有スペース)を提案することで今後の良好な学習環境についての可能性を探り、今後に役立てることを目的とする。

3. 研究方法

文献などを用いて大学図書館の利用者の変化、電子ジャーナルやデータベースサービスの導入状況、大学図書館の取り巻く現状について調査し、理解する。その後、大学図書館の学術情報基盤としての機能や建築的空間の意義、また、すでに大学図書館の情報化に対応してきている米国においての展開について把握する。以上の現状を把握し、今後、建築的視点において日本の大学図書館の在り方について考察する。

4. 大学図書館の基本的役割

大学図書館は、大学本来の目的である高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤であり、大学にとっては必要不可欠な機能を持つ大学の中核を成す施設である。そこでは、大学において行われる教育、研究に関わる学術情報の収集、蓄積、組織化が行われ、蓄積された学術情報は、検索可能な形で公開されることにより、社会の共有財産となる。これらの学術情報の活用により、大学は教育や社会貢献活動を通じて人材養成に貢献するとともに、一層の研究活動を促進する。この知のサイクルにより、学術情報は大学の教育研究活動を一層活性化するという特徴を持つ。

教育面では、教室における講義と、その前後における学生自らの学習をあわせて成り立つものであり、学生が図書資料を活用しながら自ら学習する場として、大学図書館の役割は極めて重要である。これらの教育研究支援が大学図書館の学術情報基盤としての基本的な役割である。

*1 三重大学大学院工学研究科　博士前期課程
*2 三重大学大学院工学研究科　教授　博士(工学)
*3 三重大学大学院工学研究科　助教　工修

*1 Graduate Student, Graduate School of Eng., Mie Univ.
*2 Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ.
*3 Research Assoc., Graduate School of Eng., Mie Univ.

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

5．電子化の状況について

電子ジャーナルの普及、所蔵資料のデジタル化等、学術情報流通における電子化については、この10年程度の間に急速に進展しつつある。文部科学省では平成14年の「学術情報の流通基盤の充実について」[1]において大学図書館を含める情報処理関連施設などの整備を推進し、電子ジャーナル導入経費などの臨時的経費により、国立大学における大学図書館の電子化は大きく進みつつある。国立大学図書館協会の大学における電子ジャーナルの利用の現状についての調査によれば、大学図書館におけるホームページの開設・サービスの提供は、国立大学で100%、公私立あわせても9割近くに達しており、電子ジャーナルの総購読タイトル数は57、平成15年度においては全大学で延べ85万タイトル、国立大学では1大学当たり約4,900タイトル、最多で14,000タイトルに達している大学もある[2]。

平成18年には文部科学省は「学術基盤の今後の在り方について」[1]の報告の中で、電子化への積極的な対応を打ち出しており、今後も大学図書館は、さらにこのような電子化の進展に対応していくことが予想される。

6．場としての図書館

前節で述べたように、大学図書館では情報処理化が急速に進み、資料のデジタル化やネットワーク化で資料は書物に頼る必要性が薄れてきている。しかし、一方で図書館の本質を見直し「場所としての図書館」あるいは「建物としての図書館」を再評価する動きもある[3]。文献の調査や図書の貸出というような大学図書館の利用だけではなく、学生の学内におけるコモンスペースの役割としての再評価である。

文部科学省は「学術情報基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方について」の中で、「大学図書館は、学生にとっては学習の場であると共に大学生活の場でもあり、学生に魅力ある場所としての図書館施設・設備の整備が求められる。」[1]と記述しており、さらに永田治樹(筑波大学教授)は、今日の大学図書館を捉える三つの視点のうちの一つに、「大学図書館は情報や知識に基づき学習するための知的な空間であり、また、学生同士の情報交換や勉学の共同作業を行う場である。」[3]と挙げている。また建築家鬼頭梓は、図書館を使う学生からの視点として、「いろんな座席があるとか、あるいは何人かでしゃべってもおこられない部屋があるとか、閉架書庫でも学生が入れるなど。学生にとって使い易くて便利・親切になっていくことが大切である。」[4]と語っている。

上記のこれらの考えは、大学図書館における施設としての図書館機能は文献の保存やそれらの貸出、発信といったサイクルが主な図書館利用の形態だったが、インターネットを使用しての情報入手が一般化しつつある中で、文献や書籍といった情報の発信は主な利用目的ではなくなりつつあることを示唆していると思われる。

7．先進事例としての米国

1984年にランカスターは電子化された図書館の構想を示した「ペーパーレス論」[5]を論じ、1992年にウィリアム・バーゼルは、電子図書館と場所としての図書館を対立的に見る見方の検討を「電子図書館の神話」[6]の中でされている。インターネットが普及する以前にこの様な議論をされ、次8項に示すインフォメーション・コモンズ、インフォメーション・コモンズのような事例を実践してきた米国は、電子ジャーナル化などの電子化された図書館の普及という視点で先進事例と言える。米国も日本と同様どこでも情報が手に入れられるインターネット時代の到来から図書館としての存在意義の消滅の危機に議論し、対応してきた。

2005年2月の「場所としての図書館：役割を再考し、空間を再考する」と題した報告書[7]のなかで建築家ジェフリー・フリーマンは、資料の配置を中心にしてきた10ー15年前には図書館には不要とされていた学習スペースが新しいかたちで要請されるようになった。そして図書館建築にとって重要なことは教室の学習機能の延長として、利用者がどのような情報行動をとるのかを予測しつつ機能の配置をすることだ。」と述べている。バーナード・フリッシャー（バージニア大学）もまた、デジタル時代だからなおさら建物を伴った研究図書館が必要だと述べている[7]。

8．インフォメーション/ラーニング・コモンズについて

インフォメーション・コモンズは、デジタル時代の情報資源を利用するための共有資源・公共の場として米国で提唱され始めた。米国の大学図書館においてインフォメーション・コモンズが生まれたのは、1990年代である。ウェブブラウザの先駆け的存在であるMosaicが公開され、WWWが無料開放された直後の図書館界には、図書館自体が存続していけるのかという問題が背景にあった。そして、入館者数と貸出数が減少し続けるという現象が、さらに危機感を高め、インフォメーション・コモンズは提唱され始めたのである。

インフォメーション・コモンズはこれまでの図書館や情報センターとは異なり、①電子資料、②コンピュータ資源と情報ネットワーク、それに③広い机・作業場所な

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

どの使い勝手のよい環境を整備したものである。図書館、コンピューターセンター、学習・研究室といった機能を統合し、学生の学習・研究活動を向上させることを目的に提唱されたモデルである。

ラーニング・コモンズは、2005年4月に開催された米国大学図書館協会(ACRL)全国会議の中で、次のように示されている。「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへの転換は学部教育の新たなパラダイム転換、すなわち学習理論が「知識の伝達」から「知識の創出・自主的学習」に移行したことを反映したもの」[7]したがって、インフォメーション・コモンズをさらに展開して、学生の主体的な学習活動を重視したものと考えられる。「今後の大学像の在り方に関する調査研究(図書館)報告書」[3]の中で、現時点の好例としてエモリー(Emory)大学の「Cox Hall」が紹介されている。(図1)

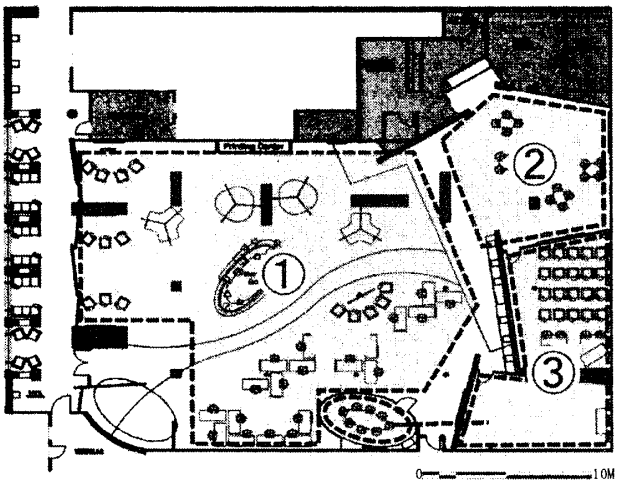

図1 エモリー大学「Cox Hall」平面図[8]

インフォメーション／ラーニング・コモンズの構成要素は、Space（施設・設備）、Stock（資料）、Staff（職員）となる。施設・設備としてはまず、図1の①に示すような、通常の閲覧席よりも広いテーブルや作業場所、コンピュータ資源とネットワーク環境、必要な資料群などがある(写真1)。図1の②に示すような、カフェやラウンジなどの社交的な施設(写真2)。そして図1の③に示すような、グループ学習室やプレゼンテーション室(写真3、4)。移動可能なパーティション等によるフレキシブルな空間などが付設されていることもある。資料としては、従来図書館で所蔵していた印刷資料のほか、電子ジャーナル・電子ブック、電子辞書・データベースなどの電子資料を利用可能とする。また、これらの施設・設備と資料を十分に活用するための人的な支援サービスは不可欠となっている。

写真1 ワークス・ステイション

写真2 カフェ

写真3 グループ学習室

写真4 プレゼンテーション室

※写真1~4参考 8) The Computing Center at the Cox Hall http://cet.emory.edu/cox/

インフォメーション/ラーニング・コモンズの主な特徴は次のようなものが考えられる。

(1)学生の学習に必要な情報資源や情報技術関連設備とそれらの活用能力を育成するためのサポートを統合的に提供することができる。

(2)図書館職員によるレファレンスサービス、教員による情報リテラシー教育等による情報技術活用支援、学生の学習相談等のサービスを一箇所で受けることができる。

(3)大学図書館が学部・研究科、情報連携基盤センターや情報メディア教育センター等学内の教育・情報施設との連携・協力を強化し、大学の教育課程に深く関与することができる。

(4)グループ・プレゼンテーション、授業、自学自習等様々な学習形態に対応したスペースと必要な設備、ツール、情報資源を統合的に提供することができる。

(5)学術機関リポジトリなどのデジタル・コンテンツと印刷体の図書館資料をシームレス(継ぎ目のない)に活用できる能力を効果的に育成する実践の場を提供することができる。

9—1. インフォメーション/ラーニング・コモンズ事例

米国ではインフォメーション/ラーニング・コモンズの言葉を用いて、整備を進めている大学図書館が増えつつある。国内にもラーニング・コモンズを用いた大学図書館の事例が登場し始めてきた。以下にインフォメーション・ラーニング/コモンズを導入した3事例と特徴を示す。

(1)南カルフォニア大学リーヴィ図書館

リーヴィ図書館は最も早期(1994)にインフォメーション・コモンズとしての施設モデルを提示し、実現した事例といわれている。リーヴィ図書館では、1階・2階のイ

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

ンフォメーション・コモンズに180台のPCを設置し、図書館で提供する電子的情報資源・ウェブ・製作用ソフトウェア・教材などを利用できるようにしている。また、学習上の助言やソフトウェアの利用支援も行っている。そのほかに、18台のAV機器、34のグループ学習室、2つの教室、プレゼンテーション室を設置している。また、英語学科によるライティング・センター（学生の文章力や批評的思考力を高めるための少人数教育を行う）も併設している点に特色がある。

（2）マサチューセッツ大学デュボア図書館

デュボア図書館は、2005年に改修を行いメインフロアにラーニング・コモンズを設置した。250座席、164台のPCを設置している。ラーニング・コモンズには、技術支援デスク、レファレンス・研究支援デスクなどのサービスポイントが設置されているほか、学内の他組織との連携により、学習上・就職上の指導・アドバイスを行うコーナーやライティング指導コーナーも併設し、多岐にわたる学生の学習支援活動を行っている。飲食に便利なよう、同じフロアにはカフェがある。飲食に関する制約は緩和されており、密閉できる飲食物であれば、館内に持ち込むことができる。

（3）横浜国立大学中央図書館

中央図書館は、2003年に改修を行った。グループディスカッションによる学習やコミュニケーションを意図し、1階にメディアブース、カフェテリアを配置している。2・3階にはPCを配置し、65台のPCを設置している。メディアホールも設置されており、講演会や発表会の場として活用されている。図書館センターでは学生のサポートを積極的に行っている。

10．まとめ

以上で、現在、大学図書館を取り巻く電子化の状況、新しく取り入れられ始めている提案モデルなどの状況について記述してきた。大学図書館の運営ついては各大学の付属図書館が積極的に実例を踏まえ議論を講じていることが分かった。6節で示した通り、図書館サービス全体にわたる資料などのサービスと並んで「場としての図書館」の重要性は高いことを記述した。学生が自主的に問題解決を行い，自分の知見を加えて発信するという学習活動全般を支援するための施設とサービス・資料を提供する必要性があることも示しているのではないかと考えられる。

そのために施設としての図書館は、独習もしくは読書するための設備だけではなく、インフォメーション/ラーニング・コモンズなどのインターネットをはじめとする情報化社会にあった学習の場や、コミュニケーションや多様な情報展開を考慮し、展示スペース、カフェ、ホールなど社交的な空間を設けている。また会話や飲食のできるゾーンづくりも、社会的・文化的変化に適合するための方策である。それに伴い大学図書館における施設計画は書架室・書庫、閲覧室、レファレンス・事務室といった機能の構成が多様化しそうである。特に、書架を読む他に学生の学習スペースとしても機能している閲覧室はあらゆる充実した機能やスペースが導入されるのではないかと考えられる。今後さらに大学図書館の機能の多様化は進むであろうと考えられる。

もともと図書館には「図書館では静粛に」という基本概念があったことは異論ないだろう。そして、その静粛なる図書館に、多様な機能を配置したものが今回記述してき事例である。このような多様化した機能を現在では、スペースの分断化を採用することによって可能にしている。しかし、平面計画やゾーニング手法としてはより最適な方法があるのではないかと思われる。

このように、建築学的な視点では図書館空間のもつ社会的・相互作用的性格を、最大化してゆくための施設・設備を整備していくことが今後必要になってくると考えられる。学習環境に適した共用スペースとしての在り方と提案を今後も行っていきたいと考える。

［参考文献］

1） 文部科学省HP　http://www.mext.go.jp/

2） 国立大学図書館協会HP　http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/

3） 永田治樹：平成17年度文部科学省「先導的大学改革推進委託事業」、今後の大学像の在り方に関する調査研究（図書館）報告書 2007.3

4） 鬼頭梓：埼玉県大学・短期大学図書館協議会講演「新しい時代の大学図書館」会報　第14号　2006.3

5） F.W.ランカスター（著）、植村俊亮（訳）：紙なし情報システム 1984

6） W.F. バーゾール（著）、根本彰（訳）：電子図書館の神話　1996.10

7） 米国大学図書館協会（ACRL）HP　http://www.acrl.org/

8） The Computing Center at the Cox Hall http://cet.emory.edu/cox/

9） 米沢誠：インフォメーションコモンズからラーニングコモンズへ、大学図書館におけるネット世代の学習支援、「カレントアウェアネス」No.289　2006

10） 逸村裕・竹内比呂也：変わりゆく大学図書館　p29 2005.7

11） 永田治樹・佐藤義則・戸田あきら：図書館の価値を高める～成果評価への行動計画～2005.2

12） 日本図書館研究会編：新・大学生と図書館　2005.8

12） University of southern California http://www.usc.edu/

13） University of Massachusetts Amherst http://www.umass.edu/

14） 横浜国立大学中央図書館HP　http://www.lib.ynu.ac.jp/

NII-Electronic Library Service